



ステークホルダーダイアログ

日本曹達の考えるマテリアリティと 企業価値を高めるCSR

化学会社として社会にとってのより良い影響をより大きくし、
持続可能な社会づくりに役立つ戦略的CSRを推進していくために、
企業価値を高めるCSRをテーマに外部有識者の皆様とのステークホルダーダイアログを開催しました。

日本曹達グループは、2016年に特定したCSR重要課題（マテリアリティ）の実践を通じて持続可能な社会づくりに取り組んでいます。マテリアリティの特定プロセスにおいては、マテリアリティ分析とともに、有識者ダイアログによる妥当性評価を行いました。

2017年の取り組みとしては、「企業価値を高めるCSR」「企業価値を守るCSR」「社会活動」の3領域において、各マテリアリティに沿ったKPIを策定し、SDGsとの関連領域である「企業価値を高めるCSR」をテーマに有識者ダイアログを開催しました。ダイアログでは、既存分野での新たな

ソリューション創出、化学会社としてのユニークイノベーションなど、日本曹達グループの「企業価値を高める」活動へのアドバイスを頂きました。

策定したKPIについては、日本曹達グループ全体の共通目標として、マテリアリティの実現とCSR活動全体のパフォーマンス向上を目指していきます。また、日本曹達グループとして持続可能な社会づくりへの活動を着実に推進していくため、特定したマテリアリティとKPIによる進捗管理を図っていきます。

※ 2016年12月9日に開催されたステークホルダーダイアログでは、日本曹達グループの「企業価値を高めるCSR」における3つの重点領域、農業分野、環境分野、情報分野に関するマテリアリティについて意見交換を行いました。2017年4月に4つ目の重点領域である医療分野を追加しています。（日本曹達グループのCSRとマテリアリティはp.14をご参照下さい）

有識者からのアドバイス

アウトサイドインで 事業を見直すことで 社会課題と事業がつながる

気 候変動が農業に与えるダメージは地球上の解決すべき重要課題であり、2016年にモロッコ王国で開催された「第22回国連気候変動枠組条約（COP22）」のテーマである。そのようななか、農業の解決すべき課題への新たなソリューション「スマートアグリカルチャー」の取組みが注目されている。日本曹達グループとして検討してみたいか。農業用水の節約や緑化推進など、農業と関連する社会課題を広く把握し「アウトサイドイン」思考で自社の事業がどう活かせるのか、新たな視点で検討することをお勧めしたい。

トランスフォーメーションの 時代だからこそSDGsへの 取組みが効果的

化 学会社のRC活動のクオリティの高さは世界に広く知られているが、さらには高い目標を掲げ、SDGsやG4に取り組む日本曹達グループの姿勢を評価したい。化学分野では、脱二酸化炭素社会に役立つ素材や製品といったソリューションが生まれてくるだろう。SDGs169のターゲットへのタッチポイントは今以上に見つかるのではないかと期待している。また、積極的な社会との対話が求められている時代背景を踏まえ、バリューチェーン全体の人権リスクについても検討いただきたい。



関 正雄

明治大学特任准教授
損保ジャパン日本興亜株式会社
CSR室シニアアドバイザー

化学メーカーならではの ユニークイノベーション& 協働への期待

企 業価値を高めるCSRを推進するプロセスでは、過去の成功や失敗に捉われないユニークイノベーションの可能性を探ってほしい。日本曹達グループは、誠実な事業活動をしているがユニークさが不足している。生産性だけでなく提供するソリューションの付加価値を同時に追求していかれてはどうか。これからはBtoBの企業もBtoCへつながる時代である。化学会社らしいユニークなバリューチェーンを再構築できれば、取組みプロセスそのものが社会性の高いコミュニケーションとなり社会からの期待もさらに高まるだろう。

インパクト思考を持って 自社の事業を棚卸することで 価値創造ストーリーが深まる

地 球規模の社会課題に対し企業一社で解決できることは限られている。これからは協働を視野に入れた価値創造の時代だと思う。例えば、東南アジア地域に建設される農業プラントなど他社のメガシステムのなかに日本曹達のコアコンピタンスによる事業構想を提案していくなど、他社との協働の可能性を積極的に探してほしい。バリューチェーンにおける製品の具体的な供給先をベンチマークすることも新たな可能性を探る手法として効果的である。緻密さと大胆さをもって日本曹達の新たな価値創造ストーリーをつくってほしい。



赤池 学

ユニバーサルデザイン
総合研究所長
一般社団法人CSV開発機構
理事長
科学技術ジャーナリスト

もっと未来へ 日本曹達グループ

企業価値を高めるCSRをテーマに、事業を通じた社会貢献について活発な意見交換が行われました。当日の対話内容について、ポイントをご紹介します。

農業分野

農業による食糧安全保障と
持続可能な農業への貢献

未来へのシーズ

- 農業における世界的食糧・飼料増産
- 生物農薬による植物保護の多様化
- 使用者の安全性向上、環境負荷低減

農業の大きな役割には地域の環境特性を踏まえた作物の収量増加があるが、この観点から発展途上国地域の飢餓撲滅に貢献できる可能性がある。また、農薬の開発メーカーとして、使用者の安全性向上や環境負荷低減への配慮は、事業を通じたCSRに不可欠な取組みと位置付けている。生物農薬については複合的に事業の可能性と社会的価値を検討している。将来的には、農業だけでなく緑化問題やペット・畜産動物保護などを対象に新たなソリューションを提供していきたい。

有識者からのアドバイス

世界では企業と生態系保護の関わりを可視化する動きがある。農薬の使用範囲や使用方法を用いたインパクト評価で、生態系保護を試算できるのではないかと。生物農薬を使うことで生物多様性を実現する挑戦は、持続可能な農業環境づくりに役立つ。日本曹達の企業価値を高めるユニークイノベーションとして育ててほしい。発展途上国における農薬の啓蒙活動は重要なリスクコミュニケーションであるが、今後は、農業関係者だけでなく市民や次世代の農業を担う学生との対話に広がっていくことが期待される。

環境分野

化学（技術力）による
健全な資源循環への貢献

未来へのシーズ

- 資源循環製品（ハイクロン、ハイジオン）による環境負荷低減
- PCBの無害化への貢献

水資源の安定供給に貢献するハイクロンは相当量の水処理に対応可能な機能性に優れた製品であり、欧州・中東・アジアなど海外需要が拡大している。

ストックホルム条約で定められたPCB無害化処理については、国内市場での社会的期待が高い。ゴミ焼却時に発生する飛灰*に含まれる重金属処理ハイジオンについては、法規制の厳格化とともに需要もさらに高まってくと見込まれる。

*焼却炉の底などから排出される主灰（焼却灰）に対して、排ガス出口の集塵装置で集めたばいじんなどを飛灰と呼びます。

有識者からのアドバイス

地球環境保全への貢献として極めて社会的意義が高い技術といえる。各国の環境政策と連動する事業であるため、積極的アプローチをしにくい側面もあると思うが、SDGsでは各地域の社会課題に民間企業の力で貢献することが明文化されている。今後は今まで以上に既存の事業でグローバル課題に貢献する機会が出てくるだろう。水の循環という視点では、途上国地域における深刻なトイレ問題に対して、日本曹達の災害対応用トイレ「スケットイレ」技術の適用範囲を世界に広げていく可能性を検討してはどうだろう。

ダイアログ出席者（開催当時）

有識者：赤池学氏 ユニバーサルデザイン総合研究所所長、一般社団法人CSV開発機構理事長、科学技術ジャーナリスト

関正雄氏 明治大学特任准教授、損保ジャパン日本興亜株式会社CSR室シニアアドバイザー

日本曹達株式会社：池田正人 執行役員CSR推進室長 / 町井清貴 執行役員総合企画室長 / 荻原 敦 CSR推進室環境・品質管理グループリーダー / 岡本隆之 農業化学品事業部企画・管理室長 / 加藤利幸 化学品事業部環境化学品部長 / 大野勇人 化学品事業部機能化学品部長 / 山田靖雄 化学品事業部開発室 室長



情報分野

高機能な材料の提供によるすべての人・環境に優しい情報機器実現への貢献

未来へのシーズ

携帯端末の軽量化や操作性に素材で貢献

ユニバーサルデザインを支える素材を提供

これまでに培った高いポリマー技術を活かしてハイエンドな携帯端末約4億台にポリマー素材を供給している。IoT (Internet of Things. モノのインターネット) 時代を迎え、軽さや操作性に優れた携帯端末は人々の暮らしに欠かせない情報機器といえる。

障害のある方、シニア世代、キッズ向けなど、あらゆる人々への使いやすさを実現するために、高付加価値素材の供給で貢献していきたい。

有識者からのアドバイス

携帯(端末)台数のインパクトだけでなく、日本曹達グループの技術が使用する人たちにどのような価値を提供できたのかという具体的な効果について検討する機会を持ってほしい。既存の技術にステークホルダーの視点を取り入れることで事業の社会性をより際立たせるソリューションに深化していくのではないかと。また、化学素材とユニバーサルデザインの関わりを次世代の子どもたちに伝える仕掛けも検討してみてもどうだろうか。次世代の新たなソリューション創発につながる社会的価値の高い取組みといえるだろう。



今回のダイアログを終えて

外から見える風景と中から見る風景

執行役員
CSR推進室長 池田 正人

日本曹達の中から自分たちの製品や技術を通してお客様やステークホルダーの皆様を拝見していると気づかないことが、有識者の皆様には見えていることに今回気づかされました。

「外からの目線で見直すことで社会課題と事業がつながる」「トランスフォーメーションの時代だからこそSDGsへの取組みが効果的」「化学メーカーならではのユニークイノベーション&協働への期待」「インパクト思考を持って自社の事業を棚卸することで価値創造ストーリーが深まる」といった視点は、今後の事業を通じた社会貢献を推進する上で大きなヒントになりました。

例えば、中から見てみると気づかなかった次のようなことに気づかせて頂きました。農薬の使用範囲や使

用方法を用いたインパクト評価による生態系の試算。「スケットイレ」の国際貢献。化学素材とユニバーサルデザインの関わりを次世代の子どもたちに伝える仕掛け。

今後の「企業価値を高めるCSR」の活動に活かしていきたいと思います。

【ステークホルダーダイアログの位置付け】

日本曹達グループとして取り組むべきマテリアリティの特定プロセスを大きく4つのステップで推進してきました。

- Step1 課題を抽出・評価優先順位付け
- Step2 有識者ダイアログによる検証・特定
- Step3 日本曹達グループ経営層への報告・承認
- Step4 PDCAの実行

2015年に開催した前回ダイアログはStep2の位置付けでした。今回は、2回目のステークホルダーダイアログとして、Step4の実行段階で1年間取り組んできたマテリアリティの取組み方やKPIについてアドバイスを頂きました。